

グローバリズムと原理論：概要（小幡道昭）*

1 マルクス経済学をどう捉えるか

『資本論』のような資本主義経済の基礎理論をベースに多元的な社会的諸要因を関連づけてゆく<総合的観点>を方法論として、資本主義の歴史的発展のうちに現れる<多様性>の解明を課題とする経済学である

2 今日の資本主義をどう捉えるか

2.1 グローバリズムはいかなる意味でポスト・インペリアリズムなのか

	帝国主義段階	グローバリズム
外面的	資本主義の地域的限界 (典型的には植民地化による発展の抑圧)	新たな地域における市場経済的発展 (たとえば中国の台頭)
内面的	国内的にも市場以外の社会編成原理の増大 (たとえば国家の影響力の増大)	市場的編成原理の拡張 (たとえば民営化など)

2.2 グローバリズムは資本主義の収斂を意味するのか

グローバリズム = (再) 収斂説	グローバリズム = (再) 多様化説
-------------------	--------------------

2.3 資本主義の発展過程のなかでグローバリズムはどう位置づけられるのか

	収斂説	多様化説
グローバリズム = インペリアリズム説		
グローバリズム インペリアリズム説		

3 オールタナティブについてどう考えるのか

	収斂	多様化
歴史的客観主義	収斂説 = 崩壊論 再収斂説 = 危機論	多様化 = 没落説 再多様化説 = 歴史的評価・主体的判断論
オールタナティブ論	アナーキズム = 市場社会主義論	規範理論 あるべき社会論

* 経済理論学会 51 回大会共通論題報告。2003 年 10 月 19 日、武蔵大学にて